論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　学　術　）	氏名	柴田　幹夫
学位授与の要件	学位規則第４条第１・2項該当		

論　文　題　目

大谷光瑞の研究－アジア広域における諸活動－

論文審査担当者

主　　査	教　授	三 宅　紹 宣
審査委員	教　授	下向井 龍 彦
審査委員	教　授	畠 中　和 生
審査委員	准教授	白 須　淨 眞

〔論文審査の要旨〕

本論文は，19 世紀末から 20 世紀中葉にかけてアジア広域に足跡を残した大谷光瑞（1876～1948）という一人の日本人の行動を，アジア近代史とアジアの諸地域，つまり時と場のなかで歴史的に把握するとともに，その行動の思想的背景も探ろうとする総体的研究である。「序章」，六章からなる【第一部】，二章からなる【第二部】，「終章」から構成され，「大谷光瑞年譜」が付される。

「序章」は，光瑞のアジア諸地域における活動の解析である。光瑞は，当時の西本願寺教団（浄土真宗）の第 22 世法主となった人である。光瑞が活動の場をアジアに求めたのは，アジアに進出する日本人に対する布教だけではなく，アジア開教も意図したからである。アジア開教とは，外交上も承認される布教権を取得し，植民地化の進展とともに仏教がアジアから消え去ることを阻止しようとしたものである。その結果，宗教をアジアと日本の前途に絡める特異な光瑞の行動がアジア諸地域に展開されることとなった。

【第一部】大谷光瑞とアジア

第一章「大谷光瑞とロシア」は，極東ロシアへ進出した日本の労働者に対する宗教活動をトレースしたものである。労働者の移動は，上海～山東～仁川～長崎～元山～ウラジオストクを結ぶ貿易ルートに沿ったものである。1894 年から，ウラジオストクに浦潮西本願寺が設立される 1915 年までを扱う。第二章「大谷光瑞と満州」は，大連日本人社会の中核的存在となった大連関東別院の活動を，1904 年に遡って整理したものである。宗教活動だけでなく在留邦人に交流の場を提供し，国家が担当すべき在留邦人子弟への教育活動も並行させたことを別院発展の要因とみなし，そこに光瑞の非凡な戦略があったとする。第三章「大谷光瑞と上海」は，辛亥革命（1911～1912）後，上海を中国開教の拠点とした光瑞の意図とその活動の様相を，上海別院（1906 年出張所として設立，後に別院に昇格）や，1921 年，新たに設置した「無憂園」を通じて明らかにする。革命後，国際都市・上海が，中国情報の発信地，経済の中心として漢口に代わって大発展することを予見していたからだという。また当地における光瑞と革命家・孫文との交流も指摘する。第四章「大谷光瑞と漢口」は，1911 年，辛亥革命が勃発する漢口に，漢口本願寺を開設した光瑞の先見性とその活動実態を明らかにする。張之洞によって洋務運動が展開された街・漢口から中国の

変革が進展することを，周到な実地調査と張之洞との交流とによって光瑞が熟知していたからだと指摘する。第五章「大谷光瑞と台湾」は，1940 年，光瑞が台湾に設置した「逍遙園」における活動を，台湾の産業開発構想と並行させて整理し，彼の新事業を検討したものである。光瑞が中国から台湾に関心を移したのは，辛亥革命後，軍閥が割拠し混乱状態に陥った中国への失望感であったと指摘する。第六章「大谷光瑞とシンガポール」は，すでに 1894 年，布教所を設置していたシンガポールに光瑞が改めて関心を示した経緯を，南洋における活動の一環として手がけたゴムの栽培（1916 年以降）や「マレー半島善後処理方案」（1941 年）への関与などによって指摘する。

【第二部】大谷光瑞の中国認識

第一章「大谷光瑞と辛亥革命」は，辛亥革命勃発当初から革命に積極的に関わった光瑞の活動の様相とその意図を求めたものである。光瑞は，革命勃発とともに教団内に「特設臨時部」を新設し，中国通の僧侶を現地に急派し，在留邦人の保護だけでなく，負傷した官革両軍を隔てることなく救護し，さらには死屍の収容までも行った。この中立的活動は，宗教教団の持つ特性の活用であるが，光瑞が組織的に大規模に効果的にそれを実施できたのは，清国への開教活動によって中国各地に別院・出張所を設置した西本願寺のネットワークの力だという。その数と規模は日本の在外公館を上回るほどであった。そして光瑞は，この成果を背景として，各国の動きに先んじていち早く孫文などの革命政府の首脳と接触した。その意図を，革命後も西本願寺の布教権の継続を求めるだけでなく，中国政局への発言権を持とうとしたからだと指摘する。第二章「大谷光瑞と『支那論』の系譜」は，辛亥革命後の無政府的状況の中国の現実を，同時期の内藤湖南などの「支那論」を意識しながら検討したものである。光瑞の著した『支那論』は，中国の現状に罵詈雑言を浴びせただけと認識されることが多いが，これはあまりにも短絡的で，孫文を中心とする革命派への根強い期待感の裏返しであり，同時に，「対華 21 ヶ条」の要求後の反日運動の高まりを直視し，日本の取るべき行動を模索したものだと指摘する。

「終章」は，宗教をアジアと日本の前途に絡める特異な光瑞の行動を「仏子にしてアジア人」として，次いで中国から距離を置き「実業家」に転じた宗教家として総括する。

本論文は，次の 3 点において高く評価できる。

(1) 本論文は，大谷光瑞の活動総体の実証的把握によって，光瑞の歴史的実像を求めようとした最初の研究成果として高く評価できる。したがって，仏教伝来の道を内陸アジアに求めた「大谷探検隊」の主催者として認識されがちであった光瑞像は，限定的認識として再考が求められることとなった。

(2) アジア主義者の一人にすぎないとした李大釗(1889～1927)の言によって研究が進展しなかった光瑞を，「国家の前途と宗教の将来」について考えた特異な宗教者として認識し，歴史学としてそれを実証しようとした意義は大きい。

(3) 従来まったく知られていなかった光瑞と孫文との交流や，辛亥革命への直接的関与を明示したことは，孫文と辛亥革命の研究に確実な一石を投じたもので，その影響が期待される。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 25 年 8 月 6 日